ECF をベースとした語彙指導研究

A Study of Vocabulary Teaching Based on ECF

河原清志
Kiyoshi KAWAHARA
慶應義塾大学SFC研究所訪問研究員
Visiting Researcher at Keio University SFC Research Institute

Abstract

This paper illustrates effective ways of teaching English vocabulary based on "lexical core" theory and "ECF" using specific examples. Most English teachers recommend that students use a conventional English-Japanese dictionary and a Japanese-English dictionary to learn the meanings of English words, where the implied strategy for acquiring vocabulary is simply to memorize as many different senses as possible listed in the dictionary. However, since it is impossible or difficult for students to find meaningful links among these senses, vocabulary learning becomes ineffective and difficult for them. As a means to overcome this problem and link those different senses, this paper applies the concept of "lexical core", which is defined as an abstraction from different senses—the greatest common divisor of the contextually-determined senses. Through acquiring the "lexical core" of each basic word, learners can construct their own semantic world. This allows them to appropriately select ("differentiation") and use each word to its full extent ("generalization"), which is the basis of lexical competence. In order to encourage learners to understand and fully use their semantic knowledge, this paper emphasizes the four objectives of devising effective exercises: "awareness-raising," "networking," "production / comprehension" and "automatization." In order to realize these objectives, some pedagogical suggestions in the form of classroom activities are given in this paper.

Keywords

awareness-raising, networking, production / comprehension, automatization, learning by doing

1. はじめに

英語教員の大半の方々は語彙指導の方法として通常，従来の英和辞典を学生に引くように推奨しているだろう。ところが，手放しでただ英和辞典を引くことを推奨する指導法によって果たして英語の意味世界が十全に学習者に伝え切れているのか，そして，そもそも教員自身が従来の英和辞典を頼りに学習してきたことで英単語の意味世界をうまく構築できているのかは，少々立ち止まって考え直してみなければならない問題である。このような問題意識を持っている筆者が，ある英語専門の専修学校で英語教員を対象にした語彙指導に関する講座を担当した。その際，『Eゲ

イト英和辞典』と『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み―ECF』(以下『ECF』)をベースに講義を展開したので，その報告を兼ねて，語彙指導の具体的な一つの方法論を提示したい。

以下報告を行う講義は，教員が英語指導の現場ですぐに役に立つ便宜を図って，『ECF』の第8章第3節「言語活動(エクササイズ)論」に沿って展開した。そこで，本稿もこの枠組みで論を進めることにする。

2. 従来の和英辞典の問題点― awareness-raising ①

『ECF』ではコア理論を基盤に，語彙能力を「使い分けつつ，使い切る能力」であると定義している(第3章)。この「使い分け」と「使い切り」を学習者に鮮明に意識してもらう工夫(awareness-raising)として様々な方法が考えられるが，ある日本語をめぐる英単語をいくつか列挙してもらい，それぞれの英単語が同じ意味領域に属しつつも意味の射程やニュアンスの違いがあることをそれぞれの語のコアの違いから探る活動をしてもらうことによって，「使い分け」の原理を体得してもらうという工夫も一つの方法である。そして，その語の意味世界を『Eゲイト英和辞典』を参照しながら，主な用例を絵で表して意味世界を探る活動をしてもらうことによって「使い切り」の原理を体得してもらうという工夫も考えられる。

そこで，当該講義でははじめに問題意識を持って頂くために，講義に参加された現役の英語教員に「～について」に相当する英単語を列挙して頂き，ペアで相談した後に発表して頂いた。その結果，{about, on, of, over}が共通して挙がり，他には{as for, with regards to, concerning}などもあった。

次に，列挙して頂いた語の使い分けについて尋ねたところ，意味の違いや使い分けが明瞭にできるという回答は皆無であった。そこで，持参して頂いていた和英辞典に当たってペアで議論して頂くことにした。講義の便宜上，配布資料の中で2種類の和英辞典から「～について」の項目を見やすい形に編集して引用して示した。以下の通りである。

和英辞典① 〈関して〉 as to; as for; regarding;《fml》concerning;《fml》with regard [reference] to; as regards; relating to; of; about; on; over (用例が 7 つ挙がっている。解説は特にない。)
和英辞典② about; on; of; over; concerning; in; for; to; with; as to; into; φ(なし) (訳語としては，「～について」，「～に関して」，「～を巡って」，「～において」が当てられている。) 用例として主なものを挙げると， ●私たちは趣味について話した。We talked **about** our hobbies. ●彼女は旅行について随筆を書いた。She wrote an essay **on** travel. ●ロビン＝フッドについての数々の伝説 many legends **of** Robin Hood ●価格について彼と契約する make a bargain with him **over** the price ●頭脳障害の原因についての研究を行う carry out research **into** the causes of brain damage

が挙がっており，語法として特記されているのは，以下の通りである。
●about は一般的内容を暗示
●on は専門的な内容を暗示
●over は about と比べて長時間の紛争・いさかいを暗示することがある
●into は深く・詳しくというニュアンスを伴うことが多い

和英辞典①に関しては，なぜよく使う about が先に示されず，普段あまり使わない as to や as for が始めに列挙されているのか理解できない，単に表現群が列挙されているのみで語義の違いや使い分けの原理が示されていない，などの意見が出た。また，和英辞典②に関しては，語法が示されている点で優れているが，例えばなぜ「about は一般的内容を暗示」し「on は専門的な内容を暗示」するのかの原理が示されていない，「over は about と比べて長時間の紛争・いさかいを暗示することがある」とあるが果たして本当にそうなのか，などの意見が出た。

確かに，和英辞典②では語法として語義の違いが示されているが，このような情報によって実際の英語使用の場面で十全に使い分けが行えるかといえば，保証の限りでない。その理由としていくつか考えられるが，(1)和英辞書における語法の記述は単に平板な情報が羅列されていて単語間の相互の情報の関連づけが意識的に行われていないため，学習者にとって「使い分け」のポイントが鮮明に見えてこない，(2)語義と連続性のある原理が示されないままの語法の記述は，単に雑多な情報が加重されるのみで，学習者にとって学習上の負荷が増えるのみである，(3)部分的に説明可能なもののみを取り上げて語法の違いについて解説してあり，例えば of や for に関しては使い分けの原理がわからないままである，などが挙げられよう（この点，さらに別の和英辞典を参照すると，「（about に比べて）of のほうが少し意味が軽い」とあるが，「意味が軽い」という意味が不明である）。

3. 従来の英和辞典の問題点― awareness-raising ②

以上のような従来の和英辞典の限界について考察した後，次に英和辞典の記述を受講者と一緒に分析した。「～について」という日本語から一番に喚起される単語である about を取り上げて，分析の対象にした。持参頂いた従来の英和辞典を見ながら，ペアで議論して頂いた。講義の便宜上，配布資料の中で1種類の英和辞典から about の前置詞の項目を見やすい形に編集して引用して示した（用例は省略してある）。以下の通りである。

1 [関係・従事を表して] a …について(の), …に関して[関する]《on の場合より一般的な内容のものに用いる》. b …に対して. c …に従事して, …に取りかかって.
2 [周囲を表して] a …のあたりに, …の近くに《【用法】《米》では around が通例用いられる》. b …のあちこちに[へ], …の方々に[へ]《【用法】《米》では around が通例用いられる》. c …ごろ(に), およそ…《数詞の前の about は副詞と考える》.
3 [身の回りを表して] (cf. → on, → with) a [通例 there is … ～ … の構文で人・ものなどが持つ雰囲気を表して] …の身辺に, …には. b …の身の回りに, …を持ち合わせて.

例えば電子辞典であれば，about を引くとまずこのような日本語による訳語リストが目に入るであろう。このことを指摘しつつ，大半の受講者が持参していた電子辞典について議論したところ，訳語だけが雑多に列挙されていて意味の全体像が見えにくい，実際学習者は英文と照らし合わせ

てこれらの訳語リストから適当に意味が当てはまるものを選んで英文を理解したつもりになっていることが多いが，そのような作業を繰り返しても単語の意味世界はわかるようにならない，例えば，1［関係・従事を表して］，とあってその後に「～について」と「～に対して」，「～に従事して」が続いているが，これらがどのように意味的な連関があるのか，これらの語義リストや用例だけを眺めていても見えてこない，などの意見が出た。

さらに，別の英和辞典で「～について」に関する部分だけを配布資料に載せておいた。以下の通りである。

[関連]～について，～に関して，～に関する◇[語法]「～に関して」の意では最も一般的な語で，of, with などの領域を侵しつつある：complain about [of] / be concerned about [with]

これに関しては，「（about が）of, with などの領域を侵しつつある」とあるが，果たして本当なのだろうか，という疑問の声が出た。また，「～について」と「～に関して，関する」という訳語はあくまでも日本語の問題であって，about の本質的な意味の実像は見えてこない，という声もあった。

そこで，このような従来の和英辞典，英和辞典の問題点を浮き彫りにしつつ，語彙に関してどのような指導を行っていったらよいかについて，受講者と一緒に考えていった。ポイントは「コア」を求心力にした語義，語法などの様々な語義情報のネットワーク化と，訳語に頼らない意味世界のビジュアル化である。

4. networking（項目の関連化）

4.1 語彙内ネットワーク

2.では「～について」をめぐって，和英辞典から{about, on, of, over}などについて，3.では英和辞典からは「～について」の典型事例である about について，従来の辞書のあり方を批判的に分析してきた。今度は「コア理論」から networking の観点でこれらを捉えなおしてみたい。

networking と言う時，2つの局面が考えられる。一つは語の中での複数あるとされている語義相互の関連化（「使い切り」の側面）と，もう一つは語と語の差異化（「使い分け」の側面）である。まずは about を取り上げて第一の側面を見てみよう。

語義相互間の連関を考えて頂くために，当該講義の第2ステップとして，実際に『Eゲイト英和辞典』を手にとって頂いて，about の項目を見ながら説明を施し，受講者に英語教育の現場でこれをどのように生かすかを考えて頂いた。筆者からの一つの提案として，次ページのワークシートに，絵・英文用例・日本語解説（和訳含む）を記入して頂きながら，コアからどのように語義が展開するかを体感して頂いた。次ページに示してあるのは，記入済みの例である。用例は『Eゲイト英和辞典』からそのまま引用している。

これは，空間関係を表示する前置詞をまずコア図式でイメージ化し，そこから様々な用法をコアと関連づけながら絵・英文用例・日本語解説（和訳含む）を一体化させて，about の意味の全体像を把握してもらう一つの試みである。意味世界を実際に絵で描いて頂く試みを行うので，『Eゲイト英和辞典』の用例が contextualization（コンテクスト化）と meaningfulness（有意味性）を図った形で体感できるので，受講者からは大変充実した活動であることを実感して頂いたようである。

このようにして，ある程度わかりやすくビジュアル化をして語の意味世界を示すことで，用法同士の networking が図れるため，教育効果はかなりあるものと考えられるし，このような方法であれば教員が教育現場ですぐに学生に対して教えることができるとの声が多く出た。

ここで，意味世界を表象する上で「絵」を導入していることについて，一言断っておかねばならない。最近は英語学習者の便宜を図るためか，意味世界を簡単に理解してもらおうとの試みで安易に絵を導入している英語学習参考書が目立つ。ところが絵を導入するには，『ECF』が拠り所にしている一つの強力な理論である，心的意味表象のあり方を分析している認知意味論に基づいていなければ却ってミスリーディングな結果になってしまうだろう。本稿で取り上げているのは，空間関係を表示する前置詞である。空間関係を表示することからもわかるとおり，これは具体的にビジュアルで示せる内的な意味世界である。前置詞の場合，コア図式に「投射」，「変形」，「焦点化」，「回転」などの認知操作を行うことによって様々な意味が展開し，その認知操作は「メタファー」が作用している。メタファーの英語教育での具体的応用例は論を改めるが，このようなワークシートを通じて，認知操作のあり方を正確に伝えてゆけば，コア図式を具体的な応用例とともに有機的に教えることができるだろう（about については「投射」という認知操作が作用している）。

前置詞：**about**　　コア：**（漠然と）…の周辺に**

【語義の展開】

空間：辺り・周辺・手元

（空間のイメージの応用）

→ 数値の周辺・活動の周辺・話題の周辺

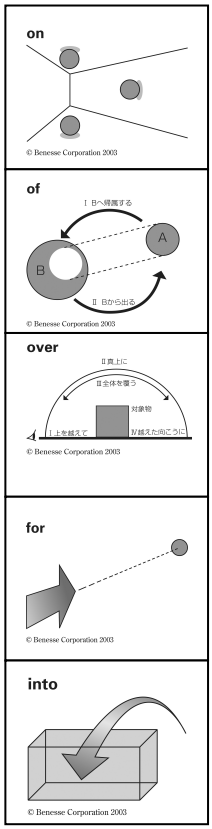
≪用例≫	≪解説≫
Kids are running about the park.	公園の周辺，辺り（子どもたちが公園の辺りを走りまわっている）
There were high-rise buildings about the lake.	湖の周り，周辺（湖の周りに高層ビルが建っている）
There's something mysterious about her.	彼女の周辺に何か不可解なことがある（彼女には何か謎めいたところがある）
Sorry, I have no money about me right now.	自分の周辺・手元に（今は手元にお金はありません）
I'll be back about 10 p.m.	10 時という時刻の周辺（午後 10 時ごろ帰ってきます）
I really feel sorry about it.	it の周辺的なことを漠然と（そのことについては本当に申し訳ないと思っている）

4.2　語彙間ネットワーク

次に，「～について」をめぐる様々な英語表現の違いを探ることによって，「使い切る」能力を向上させる教え方について見てゆく。このページに掲げているワークシートは当該講義では配布しなかったが，このような形で学習者に提示できれば，「～について」の各語の意味の差異化がしっかりと理解されるだろう。ここでは「～について」という日本語によって受講者が実際に喚起した on, of, over, for, into について取り上げる。用例は和英辞典②のものである。

このような形で，「～について」という意味での意味・用法の具体的な差を，コア図式と関連させながら絵・英文用例・日本語解説（和訳含む）を一体化させて提示できれば，学習者も一目瞭然で「～について」の意味領域における各語の差が理解でき，うまく使い分けができるようになるだろう。また，これは本格的な意味記述を試みた和英辞典の一つのあり方として，今後開発の余地があるかもしれない。コア図式の導入によって，従来の和英辞典の問題点をうまく克服しながら教材開発を今後行っていく上での一つの提案にもなるだろう。

「～について」の前置詞



on：…に接触して→「接触」から特定した話題に限定しつつ「～について」
She wrote an essay on travel.（彼女は旅行について随筆を書いた）
＊about travel だと旅行を話題の中心にしつつもその周辺にも関心が及ぶ

of：（A が）B から出ると同時に B に帰属して
→ B に関する様々なことのうち A を B から取り出して論じる「～について」
many legends of Robin Hood（ロビン＝フッドについての数々の伝説）

over：（弧を描くように）…を覆って
→ 弧を描くようにある話題を巡って，という「～について」
make a bargain with him over the price（価格について彼と契約する）

for：…に向かって→ その話題に向かって対象を指差して「～について」
Who is responsible to the parents for the education of children?
（子どもの教育について誰が親に責任を負うのか）

into：…の中に（入り込んで）→「～について」深く入り込んで
carry out research into the causes of brain damage
（頭脳障害の原因についての研究を行う）

5.　ネットワーク化の観点から見た従来の辞書記述の問題点

これまで見てきたように，『Eゲイト英和辞典』を使うと，日本語を介在させることで却って見えにくかった意味世界が絵を通して瞬時に理解できるようになる。ところが，従来の辞典の記述は語義間

および語彙間のネットワーク化という発想がないため，記載されている情報が平板で相互の連関が見えにくく，意味世界が理解しにくいことが指摘できる。例えば，和英辞典②で「about は一般的内容，on は専門的な内容を暗示」とあるが，このような記述自体がややミスリーディングでもあり，かつ，なぜそうなのかの原理的な理解ができないので，記憶にも残りにくい。また，「over は about と比べて長時間の紛争・いさかいを暗示することがある」という記述もミスリーディングであり，コア理論からすれば，over の「…を覆って」のコアから，弧を描くようにある話題を巡って「～について」ある動作をすることが意味として頭に描け，理解に苦しむことはないだろう。また，「into は深く・詳しくというニュアンスを伴うこと」という記述も，コアから考えれば瞬時に把握できるだろう。また，引用した英和辞典にある「about は“～に関して”の意では最も一般的な語で，of, with などの領域を侵しつつある」という記述はやや暴論に近く，それぞれの語の意味領域の違いを無視した記述であることも明確にわかってしまう。例えば，complain about は「～の周辺的なことで漠然と不満を言う」に対し，complain of は「～から直接起因する不満を言う」という意味だし，また be concerned about は「～の周辺的なことで漠然と心配だ」，be concerned with は with のコアが「…とともに」で一定時間持続する状態を表すので，「～について関心がある，関わりがある」の意味になるわけで，決して about が of や with の領域を侵しつつあるわけではない。

このように従来の辞書の記述には様々な問題点があるわけだが，それを『Eゲイト英和辞典』と『ECF』を頼りに克服し，learnable, usable かつ teachable な方法論での語彙指導に関する教材開発を進めて行く必要があることが，今回の講義を通じて，明確に見えてきた。

では awareness-raising により問題意識を学習者に持たせ，networking により体系的かつ本質的な理解が可能になったとして，それだけで英語の語彙指導は充分なのだろうか。答えは，否である。理解しただけの知識は，現実の英語使用の場面で working knowledge として有効に活用できない可能性があるからであり，これがまさに従来の語彙の指導法の欠点でもあったとも言えよう。そこで次に，どのようにしたら英語使用の場面で様々な語彙が「使い分けつつ，使い切る」と同時に，自動的に（automatically）産出・理解（production / comprehension）できるようになるか，について考えてみたい。

但し，紙面の制約上，以下の 6.（言語の産出・理解），7.（知識の自動化）に関しては，具体的な語彙指導例の素描とポイントを簡単に説明するに留めることとし，詳しくは論を改めたい。

6. production / comprehension（言語の産出・理解）

6.1 言語理解の側面

まず，言語理解の側面では，Language Resources を豊かにするという観点から，ある語をめぐって正しく「使い分け」つつ「使い切る」ことの理解を促進する指導をする必要がある。具体的には以下のような指導法が考えられる。

（1）「使い分け」の原理―ある意味領域の複数の語を使った用例によって語義の差を考えさせる

> 例：「～について」の用例を比べてみよう。
> I'm glad <u>about</u> the success of the project. / I'm glad <u>of</u> the opportunity to discuss the problem. / <u>For</u> that matter, I apologize. / He lectured <u>on</u> Japan and the Japanese. / make a bargain with him <u>over</u> the price / Let's look deeply <u>into</u> the case. など

(2)「使い切り」の原理―(1)で扱った語を取り上げて，その語の様々な用例を考えさせる

例:about の用例を比べてみよう。 It's about time you got here. / It takes about 20 minutes by train. / Would you stop fussing about? / I'm just about to go. / I believe it was about here. など

これらの言語素材を使ったエクササイズの方法として2つ考えられる。一つは，これらの英文を日本語に訳すというタスク，もう一つは絵で描くというタスクである。和訳のタスクに関しては，英語から意味を構築して正確に事態構成できれば，母語である日本語には一応訳せる，ということが前提になっているが，もし和訳しづらいものであれば，どんな意味であるかを日本語で説明させてもいいだろう。もう一つの絵を描くタスクは，前置詞であればできるだけコア図式を投射した絵を描くように指導したいところであるが，絵を描くことにあまり慣れていない学習者もいるので，絵で表しやすい用例を厳選する必要があるかもしれない。ここでのポイントは，英語から事態構成がしっかりできているかを，別の表現メディアである日本語ないし絵で表してみることである。

次に，言語理解の側面は，Task Handling のうち特にリーディングとリスニングにおいて自動的に comprehension ができるようになるエクササイズを行うことも必要である。具体的には以下のような指導法が考えられる。

(3)リーディング―ある意味領域を扱った語が使われているパッセージを読ませる

例:「～について」の様々な表現が使われているパッセージを読んでみよう。 (省略)

(4)リスニング―ある意味領域を扱った語が使われている会話，ナレーションを聞かせる

例:「～について」の様々な表現が使われている会話を聞いてみましょう。 A: So we have been talking about the restructuring plan. What's your opinion on this matter? B: Well, so far, I have nothing to say over this matter, but when we look into the financial condition of our company further, I would have to add something to discuss.

ここでの指導のポイントは，『ECF』が拠り所にしている認知的スタンスの二大特徴の一つである情報処理(information processing)にも目配りをさせることである。つまり，単に下線部の語の意味を確認するだけでなく，線条構造に沿って英語の情報が流れていく中で，意味処理の単位である chunk ごとに意味を構築し，既出情報の統合と後続情報の予測・検証のプロセスである on-line processing がうまくできるように指導することである。情報のまとまりで chunking を行いながら，重層的な意味構築を情報の流れに沿って行う中で，個々の語の意味をうまく表象することがポイントであるが，この論点については論を改めることとする。

6.2　言語産出の側面

今度は言語産出の側面であるが，ここでも Language Resources を豊かにするという観点から，ある語をめぐって正しく「使い分け」つつ「使い切る」ことができるように言語産出を促進する指導を

する必要がある。ここでは「使い分け」の原理に焦点を絞って，具体的に以下のような指導法を提唱する。

(1) 語彙選択―ある意味領域の複数の語を選択する問題をさせる

例:「～について」に相当する語を(　)に入れなさい。
We would like to express our heartfelt gratitude to you (①) your valuable contribution. / Where do you stand (②) this controversial topic? / The prime minister pledged to make a clean breast (③) the matter. / I am still negotiating with that company (④) the payment terms. / The only way we can solve this disagreement is by sitting down and talking it (⑤). など
【解答例】①for ②on ③of ④about ⑤over(他の語もありうる)

(2) 表現産出―ある意味領域の表現を意識しながら英語で表現する問題をさせる

例:「～について」に注意しながら以下の日本語を英訳しなさい。
①私たちは趣味についていろいろ話した。 ②彼女はその国での AIDS の蔓延(spread)について報告を書いた。 ③新製品の導入(introduction)について話し合う ④その事故についての詳細を調査する(go into) ⑤不正確な記事(the inaccurate report)について謝罪する
【解答例】①We talked <u>about</u> our hobbies. ②She wrote a report <u>on</u> the spread of AIDS in the country. ③talk <u>over</u> the introduction of new products ④go <u>into</u> the details of the accident ⑤apologize <u>for</u> the inaccurate report(他の表現・訳出もありうる)

これらのエクササイズを通じて，comprehension から production へと言語活動をシフトさせ，Language Resources としての語彙が自由自在に input(コトバからの事態構成)と output(コトバへの事態構成)できるように促していくことができるだろう。その際，いきなり難解な日本語を英語へ翻訳するタスクを課すと，comprehension のレベルからの乖離が大きすぎるので，上記のように「語彙選択」問題から始めて，徐々に「表現産出」の問題へと移行させてゆくとよいだろう。「表現産出」のエクササイズのやり方としては，上記のように日本語を英訳させるもの以外にも，絵を英語で表現させるやり方も考えられる。

次に，言語産出の側面での Task Handling では，特にライティングとスピーキングにおいて自動的に production ができるようになるエクササイズを行うことも必要である。具体的には以下のような指導法が考えられる。

(3)ライティング―ある意味領域を扱った語が使われるような状況を表した絵を見せて，それを英語で書かせる

例:「～について」の英語表現を使って，以下の絵について英語で表現してみよう。

・・・新しいビルの建設についての会議

タスク:彼らは具体的に何について議論しているのでしょうか。以下の表現を使って，自分で自由に想像して書いてみましょう。

【tool box】・talk about ・argue over the project ・a lot of concern about ～
・the report on the possible complaints ・enough evidence of the safety
・look into the area those people live in

【英作文例】（省略）

(4)スピーキング―ある意味領域を扱った語が使われている状況を設定して，会話させる

例:「～について」の表現を使って，以下の状況下で会話を作ってみよう。

状況①:口げんかしている友人2人を見て

☞あの2人，しょっちゅう女の子のことでけんかしてるよね。

A: Those two are always quarreling over girls.

☞ああ見えて，とっても仲はいいんだよ。

B: Well, in spite of that, they are very close.

状況②:やっかいな問題を先延ばしにしたいと思っています

☞ゆき子，その問題についてだけど，後で話し合うということはできないかい？

A: Yukiko, about that problem, could we discuss it later?

☞いえ，今すぐに話し合うつもりよ。

B: No, we're going to discuss it right now.

このエクササイズのポイントは，特定の項目の Language Resources の Handling が一定の Task の下でできることによって Language Resources の幅と深さを広げることを狙いとしている。したがって，単なる free writing や free conversation をするのではなく，tool box や状況設定を効果的に提示することによってある程度の縛りをかけながらタスクを構成し，特定の語彙項目に焦点を当てた効果的なエクササイズを作ることが大切である。タスクの指示の仕方は他にもいろいろ考えられるだろう。

7. automatization（知識の自動化）を図る具体案

上記のように，まさに learning by doing の観点からさまざまなタスクを課すことによって，ある語彙項目についての言語産出・言語理解が促進できるわけであるが，同時に知識の自動化も図って

ゆかなければならない。そのためには，スピードや時間を制御できる環境下でエクササイズを行う必要がある。具体的な提案は論を改めることとし，本稿ではアイデアの素描のみを記すことにする。

まず，言語理解（comprehension）においては，リーディング・リスニングに共通して，情報の処理（情報を一つの意味のまとまった単位であるチャンクとして認識し，意味を構築すること）と情報の保持（構築した意味を活性化させておいて，文脈情報として記憶に留めること）というプロセスが「流暢」にできるのが「自動化された処理」である。そのためには，一定時間内に正確で流暢な処理ができることが必要で，

・timed task handling　　時間内に一定のタスクを完成させる
・paced task handling　　一定のペースでリードしながらタスクをこなさせる

というTask Handlingを行うエクササイズが一つの案として考えられる。

また，言語産出（production）においては，ライティング・スピーキングに共通して，産出情報のプラニング（内的世界における，語彙の適切な選択とその組み合わせによるチャンク形成）と現実の構音・筆記，さらに自己モニタリングによる情報の追加・修正というプロセスが「流暢」にできるのが「自動化された処理」である。そのためには，一定時間内に正確で流暢な処理ができることが必要で，

・quick response　　口頭で瞬時に発話させる
・timed / paced writing　　一定時間内で，または，一定のペースで書かせる

というTask Handlingを行うエクササイズが一つの案として考えられる。これらの訓練は自分の内的世界を状況に即して自然に言語化して表出させるとか，相手の発言を聞きながら感情表出させたり自分の意見を言ったりするような，ダイナミックな言語活動を行うためのあくまでも土台を作るものであるので，ある程度の機械的訓練の側面が前面に出てしまうが，言語を自動化させる上では必要なエクササイズであるので，できるだけ場が白けないように，面白くて楽しい素材を作って行く必要があるだろう。

8.　今後の語彙指導の方向性

上述の通り，語彙指導はlearning by doingの視点があって初めて効果的に行えるものである。そこで，今後は『ECF』第8章に記されている「エクササイズ論」をベースにしたタスクをさまざま工夫し合って，教員同士がお互いに持ち寄り，一緒に吟味し合って実際に教室の現場で試し，学習者からのフィードバックを受けてさらに洗練させつつ体系化を図ってゆくと，「ECFをベースとした語彙指導」のあり方が具体的に見えてくるのではないかと考える。このような問題意識を共有する仲間が集い，基礎研究と実践的教育を行ってゆけるコラボレーションの場ができることを是非とも望むものである。

参考文献

田中茂範・武田修一・川出才紀編　2003.『Eゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション.
田中茂範・アレン玉井光江・根岸雅史・吉田研作（編著）　2005.『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み―ECF』リーベル出版.